

壬辰倭乱の歴史的意味

—壬辰倭乱に対する韓・日両国の歴史認識—¹⁾

鄭求福

1. 序論
2. 壬辰倭乱に対する韓国側の歴史認識
3. 壬辰倭乱に対する日本側の歴史認識
4. 今後の望ましい両国の歴史認識
5. 壬辰倭乱の性格と歴史的意味
6. 結論

1. 序論¹⁾

歴史は過去の事件であり、後世の人間がいかにより解釈するかによって異なった記述がなされる。特に、近・現代の歴史学は、東洋の伝統史学とは違って資料の編纂ではないため、認識の仕方によって記述が大きく異なることになる。過去の事件としての歴史は、それ自体完結したものだが、歴史は教育を通じて受け継がれている。それ故に歴史認識にともなう叙述が教育を通じて反映されることになる。

過去の歴史認識は、一時期の歴史学者の研究にのみ影響を及ぼすだけでなく、国民一般にとっては、過去の学説に過ぎないながらも、その影響力は記憶を通じて持続する。そして、歴史認識の持続力は、国民の底辺に潜在する無意識の領域にまで影響を及ぼしている。そこで、過去に行なわれた研究に対する研究史的検討が必要となるわけである。

壬辰倭乱も例外ではない。過去の事件としての壬辰倭乱は1592年に起こり、1598年に終わった事件である。ところが、この事件は、韓・日両国間において双方の歴史認識に従って非常に異なったかたちで研究され、記述されている。現在大部分の日本の高等学校用歴史教科書では、壬辰倭乱については北島万次の研究結果が大きく反映されており、韓日間で問題となる点はないが、一部の教科書にはいまだに戦前の研究成果から影響を受けているものがある。

従って、本稿では、一部の教科書に反映された問題点がどこに起因するのかを明らかにしようとする。現在も韓日両国が壬辰倭乱に対してもっている認識には共通点もあるが相違点もある。本

¹⁾ 本稿は2003年6月、対馬巖原の韓日歴史共同委員会二分科会議で発表した原稿である。5章は、当時テーマは設定していたが内容を提示できなかった。これは、2004年5月にソウルで開催された韓日歴史共同委員会で開催された内容を若干修正したものである。対馬での会議で発表した内容は、討論文が収録され掲載された関係で文意を損なわない範囲内で若干書き換えた。

稿で主に検討対象とするのは、両国で民族主義的歴史観が歴史解釈の主流をなしていた時期である。両国の歴史認識に対しては、日本の場合は主に1945年までの単行本を検討し、韓国の場合は主に1980年代までの単行本を検討した。異なった時期を設定したのは、両国の歴史学の発達に時期的な差異があるためである²⁾。日帝時代は、韓国人は植民地支配を受けていたため韓国史を自由に研究できる条件が整っていなかったばかりでなく、日本人と戦った壬辰倭乱について研究することは考えもよらない状況であったことに留意する必要がある。

本稿は、今後韓日両国が善隣友好を強固にし、さらには世界で二度とこのような残酷な戦争が起こらぬようにしなければならぬとの哲学をもって記すものである。戦争はどんな理由であれ正当化してはならない。戦争は無辜の民間人が被害を被り、人間の理性が全て否定されて、武力による無慈悲な破壊と殺傷、自然や文化が破壊されるからである。すなわち、戦争はそれ自体人間全体の歴史を破壊する行為といえることができる。戦争の美化や賞賛は今後の人類史の発展を阻害する犯罪行為である。人間の歴史から戦争をなくそうとする努力は、政治家だけではなく歴史学者や次世代の教育者たちも行い、かつ、そうした歴史観をもつべきであろう。

2. 壬辰倭乱に対する韓国側の歴史認識

韓国において、壬辰倭乱に関する用語は、過去の文献においては壬辰乱、丁酉乱、倭変、倭乱、倭寇、倭賊などで、これらは『朝鮮王朝実録』に記録されている。個人の手によるものでは、辰巳の乱、龍巳の乱などと表現されており、‘壬辰倭乱’という用語が最初に見られるのは李肯翊(1736-1806)の『燃藜室記述』においてである。³⁾

20世紀の初めに統監府の指示を受けて作られた韓国の検定初・中等歴史教科書には‘壬辰乱’と表記されたが、実際の記述では日本の侵入、来寇、侵虜、略奪などと表記された。その後、‘壬辰の倭乱’という用語を慣用的に使用してきたが⁴⁾、‘壬辰倭乱’という学術用語を最初に使用したのは1946年に刊行された金聖七の『朝鮮歴史』⁵⁾ではなかったかと考える。北朝鮮では壬辰倭乱という用語のかわりに‘壬辰祖国戦争’と表記しており⁶⁾、韓国では国史編纂委員会が編纂した通史で‘日本の侵寇’、‘壬辰倭乱’と記述している⁷⁾。

現在、韓国の学界では、‘壬辰倭乱’は1592年に起こった壬辰年の戦争から1597年の丁酉再乱までを含めた全体の戦争を指す用語として使われている。‘壬辰倭乱’の略称として‘壬乱’とも呼んでいる。

壬乱の終結後、1605年に徳川幕府と会談した松雲大師が捕虜1,295人を償還し、1607年には回

²⁾ この文章は発表後に追加された。

³⁾ 『燃藜室記述』巻15、宣祖朝故事本末「壬辰倭乱大駕西狩」

⁴⁾ 中村栄孝「文禄慶長の役」『大日本戦史』3(1939)、254頁参照。

⁵⁾ 金聖七『朝鮮歴史』(朝鮮金融組合連合会刊、1946)。著者は「壬辰倭乱」、「丁酉倭乱」という題目で記述している。

⁶⁾ 『朝鮮全史』9巻(1980)。

⁷⁾ 1978年に発刊された国史編纂委員会『韓国史』12には、‘日本の侵寇’という表題を設けたが、本文の記述では‘壬辰倭乱’を使用し、同委員会が1995年に発行した『韓国史』29では‘壬辰倭乱’という題目で表記した。

答兼刷還使の呂祐吉によって1,300人の捕虜が償還された。1606年、上記の回答使の派遣で徳川幕府と国交が再開されて後、朝鮮では壬辰乱は過去の事実として認識されたが、一般国民は、日本人は不倶戴天の敵で残忍だとの認識を持っていた。戦争中に約10万人が日本軍に捕えられ⁸⁾、残された家族に大きな傷を負わせた。

韓国民族主義歴史学の創始者として知られている申采浩は、1908年に李舜臣の『乱中日記』や状啓などを読んで「李舜臣傳」⁹⁾を著し、海戦での勝利を詳しく記述し、結論として英国の世界的な海将ネルソン提督よりも優れた名将であると明らかにした英雄主義歴史観、闘争的民族主義歴史観を展開した。申は、『乱中日記』を最初に利用した学者といえ、壬辰乱を‘倭寇’、豊臣秀吉を‘豊臣賊’と表現した¹⁰⁾。

壬辰倭乱に対する全般的な研究は崔南善によってなされた¹¹⁾。崔が1931年に発行した『壬辰乱』は、第1部「経過」と第2部「影響」とに分かれていたが、「影響」の中で壬辰の人物について述べているので内容上は3部構成だったといえる。壬辰倭乱について、日本では多くの研究がなされたが、韓国では研究らしい研究がないとしてこの書を出したという。崔は日本の植民統治に協力した親日歴史学者だったが、韓国人だったので日本人とは異なる歴史的観点をもっていた。壬辰倭乱が朝鮮社会に大きな影響を及ぼしたとする観点は、歴史家としての新たな面を示している。壬辰乱が韓国側に及ぼした影響と日本側に及ぼした影響とを扱い、壬辰以前までは韓国が文化的にも国力でも日本より優位だったが、壬辰を契機に立場が逆転したと見たのは、日本人の意識とは異なるといえる。文化においては鉄砲の伝来、鉄甲船の製造、飛撃震天雷、火車、四瓜鉤、蒺藜砲の発明など、韓国人の独創性が際立っているとし、社会上の影響としては、結婚の混血現象、衣裳と食品において明の影響を受けたことや、民衆の生活において歌謡に悲哀を込める現象を指摘した。

また、崔は、日本に及ぼした影響として陶磁器工芸の発達、活字術、豆腐製造法、真彩濃墨の画法が伝えられ、学問と書籍の伝来で徳川の文治が成立したとし、姜沆、李真榮、洪浩然、高本紫溟(仁同縣監 李宗閑)、本妙寺主持の日遙上人を挙げた。日本の上古文化の発展が半島人に助けられたように、近世の日本人が再び文化的発展を朝鮮に助けられた¹²⁾と主張した。

1945年以降、韓国での壬辰倭乱に対する研究は動機、過程、影響のうちの動機に関する研究は極めて少なく関心があまり見られない。その一方で、主に過程に関する研究に関心を向けている。韓国では、日本が侵入した動機として日本国内の新興勢力を抑えるためという説¹³⁾が定説化している¹⁴⁾。

⁸⁾ 李章熙「倭乱中の社会相」『韓国史』29巻(国史編纂委員会、1995)、173頁。

⁹⁾ 1972年に発行された『丹齋申采浩全集』では、下巻で「李舜臣実記」としたが、1977年の改訂版では「李舜臣傳」とした。これは19章に及ぶ詳しい伝記である。

¹⁰⁾ 『丹齋申采浩全集』(1977)、改訂版中巻「水軍第一偉人 李舜臣傳」第12章以下で、豊臣賊、倭賊と表現した。また、15章を「倭寇の末路」とし、記述中には壬辰乱とも表記。

¹¹⁾ 崔南善『壬辰乱』(東明社刊、1931)。

¹²⁾ 崔南善『壬辰乱』(東明社刊、1931)、69頁。第2編「影響」中の59節「文化線上にある半島と日本の地位転換」で、壬辰倭乱を経た後に日本が優位であると記述している。

¹³⁾ 韓 洵「壬辰乱の原因に対する検討—豊臣秀吉に挑発原因について」『歴史学報』1、1952、及び「壬辰倭乱」『韓国民族文化大百科事典』18巻(1990)。

¹⁴⁾ これは韓 洵の研究結果が利用されているだけで、日本側で扱っている勘合貿易の再開説、功名説、西欧文化

なぜ初期の戦闘において官兵がたやすく敗れたのかについての研究では、政争、政府による厳しい収奪による民心の離反、凶作による飢饉、軽武崇文による文弱などが指摘されているが、これらは文献史料に基づいた論証が充分になされたとはいえない。当時の古文書などを活用せねばならず、朝鮮朝の政治、行政、軍事体制に対する理解が構造的になされなければならない。

壬辰倭乱の過程に関する研究としては、戦史的な側面から考察した李炯錫の『壬辰戦乱史』4巻を挙げることができる。この研究は、韓中日の文献を積極的に利用したという点に意義がある。李は壬辰倭乱の戦争上の特異性として10の点を挙げているが¹⁵⁾、韓中日の史料を比較的幅広く利用して戦史を記述し、民族レベルでの教訓を見出そうとした。

壬辰倭乱のうち義兵活動についての研究がかなり進展した。義兵とは、官軍ではなく、郷土を守り、国家救済のため、つまり義のために自発的に起こった私的軍隊で、義兵長の統制下に武器や軍糧を自らまかなって敵と戦う軍隊である。崔ヨンヒによると、義兵の性格から軍律、義兵の構成員、義兵の性格変化にいたるまで社会史的な関心をもち、王朝実録を中心に研究した¹⁶⁾。義兵長には官僚経験者、未仕宦者がいるが、主に官僚経験者が多く、武人と比べて儒者層が圧倒的に多かったことが明らかになった。そして、李章熙によって関北、関西地方、海西義兵の研究がなされ、義僧軍に対する研究も進められた。特に、李は軍糧問題について詳しい研究を行なった¹⁷⁾。以上の研究は壬辰倭乱の実状を明らかにする実証的な研究であったといえる。

1960年代から始まった韓国での壬辰倭乱史研究は義兵活動分野に集中し、この傾向は70・80年代以降も続いた。現在まで単行本で刊行されたのが10種、論文は60本を越える。このように韓国で義兵史研究に関心が集中したのは、壬辰倭乱の歴史を認識するにあたって韓国と日本の立場が基本的に異なることを示すものである。つまり、義兵は侵略者に応戦するために抗戦していた朝鮮側の立場をよく表わしているからである。また、義兵に関する史料が豊富であるとともに、民衆の歴史、地方の歴史の一部分だからである。

従って、湖南、嶺南、湖西地方の義兵に関する事例研究が、戦跡地と関連付けて地方史研究の中心テーマのひとつとなっている。義兵史研究は、16世紀以来地方統治権を掌握してきた士林勢力と関連付けて理解しようとしている点が顕著である。

海戦に関する研究は、趙成都が申采浩の「李舜臣傳」を平易に書き直した『忠武公李舜臣』¹⁸⁾が刊行され、海戦の勝利の要因を李舜臣の憂国忠正、徹底した事前の備え、斥候兵の使用、地勢の利用、慎重さ、優れた統率力、指揮将官の作戦会議などと把握した¹⁹⁾。その後、海戦の勝利の原因を朝鮮の水軍制度、船舶や火器の優秀性の面から理解しようとする新たな研究が行なわれた²⁰⁾。

の影響説などは完全に無視されている。前掲の国史編纂委員会刊の『韓国史』や『韓国民族文化大百科事典』などの記述が該当する。

¹⁵⁾ 李炯錫の『壬辰戦乱史』4巻(韓国自治新聞社刊、1974)初版、(1994)再版。再版本自序の11、14頁参照。

¹⁶⁾ 崔永禱『壬辰倭乱の社会動態』(韓国研究院刊、1975)。

¹⁷⁾ 李章熙『壬辰倭乱史研究』(亜細亜文化社刊、1999)。

¹⁸⁾ 趙成郁『忠武公李舜臣』(トウオン社、1969)。

¹⁹⁾ これにつき具体的に記述したわけではないが全編を読めば以上のように要約できる。

²⁰⁾ 趙媛來『韓国史』29(国史編纂委員会、1995)、65-69頁、及び『韓国民族文化大百科事典』18巻(韓国精神文化研究院刊、1990)、壬辰倭乱 参照。

壬辰倭乱の影響については、社会史的な側面が新たに加わった。豊富な実録史料を通じて糧餉問題、反乱問題、降倭問題、附倭問題などが研究された。

壬辰倭乱を見る視点においても反省が促された。従来、陸地戦では朝鮮軍が敗北し、水軍の戦闘では勝利したという歴史認識から、壬辰倭乱は結果的に見て朝鮮軍が勝利し、日本軍が敗北した戦争であったとする史論が提起された。

“壬辰倭乱の戦局の推移は、ちょうど太平洋戦争において真珠湾攻撃が戦争の全てではないことと同じである。壬乱の総決算は、米国に最後まで抵抗し勝利したベトナムの抗戦や、ソ連による侵攻に遂には勝ち抜いたアフガニスタンの抗戦に喩えることができ、粘り強さや抵抗によって成し遂げられた朝鮮の勝利であり、その結果は敵にとって被害が大きかった。(中略) 壬乱の戦局の大勢や終末が朝鮮側の明らかな勝利であったのに、従来、壬乱といえば即、朝鮮側が大敗し、敵は常に破竹の勢いであったと過った認識をもったのは、やはり日帝植民史学の歪曲に起因するのである。たとえ侵寇や侵略であったにしても、古くから朝鮮よりも強い存在であったことを誇示することによって、韓末以降、朝鮮の不法支配を正当化しようとしたのである。その代表例として、南満州鉄道株式会社調査部の支援のもとに行われた池内宏の『文禄慶長の役』を挙げることができる。”²¹⁾

要するに、1945年以降の壬辰倭乱に対する研究は、資料によって戦争の実状を明らかにする実証主義的歴史学といえるが、今後はここから脱して資料が集中していなくても明らかにすべき問題を直観的に見出してこれを解決していかなければならない。例えば、壬辰倭乱のうち民衆の生活相、壬辰倭乱の性格論、1593年—94年に入り国民の生命を奪い去った疫病が医学的にどのような病気なのか、壬乱中に交通や通信はどうだったのかということなどを研究する必要がある。そうして、壬辰倭乱に関する韓中日の資料を比較して研究する必要がある。日本側の古文書資料を利用した研究は李炯錫の研究しかない。韓国側の日記資料、古文書が積極的に利用されなければならない。

さらに、歴史を偏狭な民族史の見地から見のではなく、人間主義的な見地から把握する必要がある。特に、1965年に韓・日国交樹立がなされた後、現在、排日や反日感情を壬辰倭乱と結びつけて認識する国民はほとんどいない。これは日本帝国主義の植民支配に対する感情とは異なるものである。

韓国では、壬辰倭乱に関して、朝鮮前期社会を破綻せしめた外侵と認識し、韓国史の中心問題ととらえていない。これはただ過去の事件として理解されている。また、壬辰倭乱は、明軍が参加したものの、韓国側では3国の戦争ではなく朝鮮と日本の戦争ととらえる見解が主流である。明軍は援軍だったからである。

3. 壬辰倭乱に対する日本側の歴史認識

²¹⁾ 許善道「壬辰倭乱史論」『壬辰倭乱の再照明』韓国史論22(国史編纂委員会刊、1992)、189-193頁。

近代に入り最初の壬辰倭乱研究として、1893年に木下真弘によって『豊太閤征外新史』が刊行された²²⁾。この書についてはまだ見ていないが、征伐²³⁾という用語を初めて使用したという点で注目される。これは、日本で国学の成立を背景として、19世紀後半にいわゆる‘征韓論’が盛んになり、本格的に韓国進出がなされた状況と無関係ではない。近代日本の国学は思想的に近代の国民形成 (Nation Building) のバックボーンとなったが、排他的で国粹主義的な点から現在においては廃棄すべきイデオロギー的研究である。²⁴⁾日本において民族主義の発展とは、国家膨張のために戦争を推し進めるイデオロギーであった。

1894年、北豊山人によって書かれた『文禄慶長 朝鮮役』²⁵⁾は、木下真弘の本から影響を受けたことは凡例第2項で明らかにされている。著者は序文で「本人は早くから豊公がわが武を海外にとどろかせたことを欽慕してきた」と記しており、武力による海外進出を賞賛していることは容易に理解できる。さらに、「最近朝鮮に東学党の乱が起こり、わが帝国の軍隊と清軍がともにかの国に派遣されたが、数千の我が軍が朝鮮半島に上陸したのは豊公以来、実に今回がはじめてであり、少壮子弟が文禄慶長の役について問う者が後を絶たない」と述べていることから当時の日本の雰囲気のうちがたいところを知ることができる。

壬辰倭乱を‘朝鮮役’²⁶⁾と呼んだ理由は凡例第1項で次のように明らかにしている。「以前はこれを‘朝鮮陣’、‘高麗陣’と呼んでいたが、これを‘朝鮮役’と改めたのは旧史に‘征韓役’と称したことがあった。また、この戦争の主は征明にあり、朝鮮で戦ったのは明を討つことが目的だったが、朝鮮での戦闘は中途の随伴事件で、山崎役、関原役の例に従い戦地の名を取って命名した。」²⁷⁾すなわち、明を討てとの命を受けたが、明に入ることができなかつたために朝鮮が戦場になったという意味で‘朝鮮役’と呼んだことが確認できる。

日本において、1894年頃から爆発的な人気を得て読まれたこの書の第1章「外征の目的」の冒頭部分は次の通り。

『神功皇后が対馬から舟師を発して三韓を征服した1391年後に、豊臣太閤秀吉が再び対馬から軍を送り、明国を征せんとしてまず朝鮮を討った。これはわが国による海外遠征の2番目の戦争だ……。豊臣秀吉に天が生をもう少し与えていたならば、愛新角羅が明を討って清国を建てる前に中国が日本の領土になっていたろう。』

神功皇后の三韓征伐は『日本書紀』が伝える伝説的な記事で、韓半島にその痕跡は無く、現在は否定されているが、これを豊臣秀吉とオーバーラップさせて明らかにする慣行はすでに江戸中

²²⁾ 日本側の壬辰倭乱研究史文献目録を参照。

²³⁾ 征伐：伝統的に東洋では、征伐というのは天子が反乱を起こした諸侯を討ち平定するという意味である。これには極めて道徳的な意味がこめられている。

²⁴⁾ 民族主義は、西洋では Nationalism の翻訳語として使用され、近代的な政治イデオロギーと理解されているが、西洋の自由、博愛、平等という国民主義、自由主義という意味は完全に無視されて、民族主義と理解されているのは、西洋以外の地域でひどく歪曲された用語になっているということである。

²⁵⁾ この書は東京博聞社から1894年7月18日に出版され、7月20日に再版が印刷された。同年8月5日に3版が出され、日本で爆発的な人気を得て読まれた。日本国粹主義を推し進めるのに大きく貢献した責任を確認できる。

²⁶⁾ 役の本来の意味は、国境の守備、または兵士 (諸橋轍次『大漢和辞典』および『中文大辞典』参照)。

期に現われ、末期には征韓論が台頭した際に論議の過程で現われている。²⁸⁾しかし、神功皇后の新羅征伐説は現在の日本の歴史学界では否定されているが、対馬厳原市にある八幡宮神祠の案内板には今でもそこが神功皇后が新羅を征服して最初に足を踏み入れた場所という説明が書かれており、一般国民を教育している。²⁹⁾本書は日本の対外膨張主義を推し進めるために壬辰倭乱が記述され、豊臣秀吉は万古の英雄として説明されている。そうして、全体の内容は明軍と日本軍の戦闘状況を把握することに力点が置かれている。

本書の主眼点は壬辰倭乱の全貌を明らかにするための研究ではなく、壬辰倭乱を明と日本の戦争ととらえ、清日戦争を激励する目的で軍人精神の教育のために書かれたといえる。本書の理論のみならず記述をそのまま引き継いだ書が1916年に帝国軍人会から出版された『通俗日本精史』³⁰⁾である。この書では‘朝鮮役’という表現を‘朝鮮征伐’というさらに攻撃的な用語を使用しており、序文で「歴史を過去の死んだものではなく、生きている人生の延長図」と明らかにして、学者による実証的な歴史学に対抗し、読まれる歴史叙述、説話中心の歴史叙述を強調している。³¹⁾この書は、また、英雄中心の歴史叙述といえる。

壬辰倭乱の研究において学問的に重要な画期となった著書は、池内宏の『文禄慶長の役』²⁾と1924年に参謀本部から出された『朝鮮の役』を挙げることができる。池内の著書のうち、正編は全体が壬辰倭乱の背景についての説明であるが、その歴史認識は英雄主義的歴史観であった。³³⁾それは、豊臣秀吉は征伐攻略で偉大な功績を残し、徳川家康は経国治世で抜群の機能を発揮した人物であるとした表現³⁴⁾からうかがうことができ、本書全編からもそのような精神を読み取ることができる。

壬辰倭乱の戦役は竜頭蛇尾に終わった、つまり失敗した事業と評価している。理由は朝鮮8道はもちろん4道さえも、否1ヶ道すら得られなかったためという。さらに、豊臣秀吉の当初の意図は単に朝鮮征服だけでなく明国400余州を席卷することが定説であり、これは疑いの余地無しとしている。さらに、明国400余州ばかりでなく、いわゆる天竺、南蛮までも征服する目標を設定したことを立証し

²⁷⁾ これは凡例に書かれている内容である。

²⁸⁾ 北島万次「豊臣政権の朝鮮侵略に関する学説史的検討」『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』15-21頁。これによると、江戸時代には、従来朝鮮は日本の属国だったが、最近朝貢を行なわなかったので豊臣秀吉が朝鮮を討つたと歴史を誤って伝えた。北豊山人の書ではこのような事実はずっと記述されておらず、朝鮮は高麗王朝を継承した国家と紹介しているが、江戸時代の豊臣秀吉論を継承しながらも征韓論の歴史認識を継承したものと理解される。

²⁹⁾ (補註) この文章は発表後に追加した。

³⁰⁾ この書は上下2巻で構成され、壬辰倭乱は上巻にある。上巻は、服部弘が執筆し、壬辰部分では章の表題と記述から北豊山人の記述をほぼそのまま記し、説話的な内容を少し付け加えた程度である。この書は、数名の大臣経験者が題字を書いていることから国民に読まれた精史教育教材であったと考えられる。

³¹⁾ この書の序文は権友会会長が書いた。

³²⁾ この書は正編、別編、附編の三編より成っている。正編の凡例において、正編は壬辰倭乱の全体経過を扱い、別編は各部隊の戦闘状況を記述し、附編はその他関連論文を集めたと明らかにしているが、実際には、正編は全体経過とらよりその背景説明といえる。つまり、第1章「豊臣秀吉の対外的態度」、第2章「鮮王入朝の命と通信使の来朝」、第3章「証明の計画とその準備」、第4章「征鮮遂行の事情」となっている。正編は1914年に南満州鉄道株式会社歴史調査室で編纂され、別編は1936年に、附編は1977年にそれぞれ刊行された。

³³⁾ 池内は数回にわたり英雄論に言及している。一例として、前掲書正編の35頁。ここで豊臣秀吉を曠古の英雄と論じ、英雄論を展開している。

³⁴⁾ 池内宏『文禄慶長の役』正編、吉川弘文館刊本、1-2頁。

ようとした。しかし、豊臣秀吉が1587年に薩摩の島津義久の降伏を容易に受けて、加須屋武則に通知した5月15日付朱印状や6月1日本願寺から告げた書状の解釈に深刻な誤りがあると考える。³⁵⁾

このような史料の曲解は、大陸侵略のための帝国主義膨張理論を歴史的に支えるために、豊臣秀吉の対外侵略を用いることから生じた。³⁶⁾これは、国家の膨張のために学者が本来の意味を曲解して一般国民を欺く曲学欺瞞の罪を犯したものだといえる。豊臣秀吉が中国を征服しようとした意図を表しているというこの2つの史料は、以降の記述では用いられていない。

池内の歴史認識は日本による韓国の植民支配を当然視し、永久支配を画策した植民論の展開といえる。池内の研究法がたとえ文献資料の実証という面ではいささかの寄与があったとはいえ、その歴史認識は否定しなければならぬ。にもかかわらず、このような書が史学史研究資料としてでなく壬辰倭乱史の研究書として再版され読まれている事実は、池内の影響力が現在までも一部の向きに見えざる歴史的力として作用していることをはっきりと示しているといえる。その歴史観は民族主義的国粹主義といえる。

『文禄慶長の役』別編は各部隊の動静を韓日両国の資料を通じて実証した記述で、日本の学界で学問的業績として高く認められ、古典的価値をもつ資料と評価されている。³⁷⁾本書では咸鏡道租税牒が初めて用いられた。³⁸⁾ここに見られる池内の歴史観は正編のそれとは異なるように見られるが、実は同一線上に立っている。多くの資料を中心にして記述しているため、正編に見られたような主観的な表現は少なくなっている。にもかかわらず、朝鮮を‘鮮’と記述し朝鮮蔑視観を示しているかのように評価されている。³⁹⁾のみならず咸鏡南道の義兵を‘騒乱’、‘動乱’などと表現している点も指摘できる。

1924年に参謀本部から『朝鮮の役』が出された。1965年に復刊された時に解説を書いた桑田忠親は、豊臣秀吉が戦争を起こした原因として指摘されていた5つの説⁴⁰⁾を批判し、結論として国内統一を実現した過剰な自尊心や国力に対する過信があり、雄大な海外経営を計画したと主張した。

本書では任那日本府、神功皇后の新羅征伐を記述し、韓国と中国の王朝変化、日本との関係史を整理しており、倭寇の被害についても記述している。この書では豊臣秀吉の外征の原因を立証しようとした。

³⁵⁾ 日本の古文書判読には門外漢である者としてこれを指摘するのは不適切かもしれないが、朱印状の「彼地自大唐南蛮国之船着候間．．．」の部分や、書状の「博多津大唐南蛮高麗自国船着候間．．．」を漢文式に解説すると、かの地(筑前国、博多)もしくは博多津は大唐、南蛮、高麗各国の船舶が到着していた所と解釈しなければならず、肥後国で佐佐成政の反乱を鎮王し、その首謀者の罪を量る連書状に見られる「唐南蛮国迄可被仰付．．．」は、その罪状を唐国、南蛮国にまで知らせるという表現で、大唐、南蛮、高麗は、豊臣秀吉が理解していた天下の概念であったと解釈すべきであろう。以上の資料でもって各国を征服しようという意図と解釈するのは文脈上大きな誤りと考えられる。当人も「可被仰付」の意味が曖昧だと指摘している(14頁参照)。本稿を発表した後、北島万次氏より、「可被仰付」が「討つ」という意味である根拠として日本国語辞典の資料を送付いただいた。

³⁶⁾ 池内、前掲書、2-3頁。

³⁷⁾ 北島万次『文禄慶長の役』附編 解説(吉川弘文館刊本、1986)。

³⁸⁾ しかし、この文書についても古文書学的研究が必要と考える。

³⁹⁾ 北島、前掲書、146-147頁。

⁴⁰⁾ 1)織田信長の発想に基づいたとする説、2)3歳の鶴松が死んだため悲痛のあまり出兵したとする説、3)勘合貿易説、4)自分の名誉欲のためという説、5)国内の検地によって排除された武将の不満を解消するために堺や博多の商人がポルトガル商人の活動を抑えるためとする社会経済学者の説。

豊臣秀吉が明を討つ意志を明らかにしたことを、1587年5月29日に夫人宛に送った手紙から引用しており⁴¹⁾、この資料は以降日本の学界で利用されている。

義兵の戦闘は、どこどこでの戦闘と表現して詳しく説明し、陸戦と海戦を詳しく紹介している。日本が敗れた戦闘も詳しく紹介し、中国や朝鮮、日本の資料を網羅して詳しく扱った点において参考にすべきである。しかし、この書も日本が神功皇后以降、朝鮮が日本の支配を受けてきたと捏造された歴史認識をもとに記述されたといえる。日本が勝利できなかったのは諸将の不和が原因だったととらえている。⁴²⁾

徳富猪一郎は1920-21年に新聞に連載した『朝鮮役』3巻を1935年に刊行した。⁴³⁾この書の序文で「壬辰倭乱は戦争ではなく外交だった」、戦役の目的は「兵力蹂躪ではなく平和懐柔だった」とし、続いて「この戦争と外交を通じて日本の国民性の大きな欠陥が暴露された」述べている。

本書で壬辰倭乱は世界的な事件ととらえ、16世紀の航海遠略時代と見ている。これは、中村栄孝、北島万次によって受け継がれ、日本の学界での定説として認められている。⁴⁴⁾

徳富猪一郎は「日本が島国で有史以来外国に征服されたことがないのは実に不可思議なことである。大和民族である日本国民が本来武勇の民族であったことを特筆せざるをえない。倭寇は単に海賊専門業ではなく、国民的海外発展を成した。倭寇の起源は有史以前からであり、平穏な時は貿易を行い、有事には倭寇になった」と述べて、歴史をはなはだしく歪曲している。⁴⁵⁾

この書は資料収集が朝鮮、明、日本、宣教師にまで及んでいる点と資料を中心に解説している点は、池内の学説を受け継ぐものとみるべきで、その論旨もおおよそ同じである。しかし、徳富は結果的に失敗に終わった戦争と見ており、その原因を次のように挙げている。⁴⁶⁾

1. 敵情偵察が不十分—秀吉は朝鮮と明について何も知らなかった。
2. 出征兵士の人気をひきつけられなかった。
3. 外征について相談する人物が無かった。
4. 豊臣秀吉は朝鮮王さえ捕えれば全国民が日本軍を歓迎するものと考え、朝鮮は出征前にすでに日本に服従していると即断していた。

徳富の歴史認識も積極的な民族主義の見地から日本国民の対外征服に勇気を与えようとするもので、そのために倭寇などを歪曲するに及んだ。

1945年以前の壬辰倭乱研究の業績として、中村栄孝の『文禄慶長の役』⁴⁷⁾をあげることができる。中村の壬辰倭乱に対する認識は「東洋を一体とする一大平和圏を建設し、大陸に皇化を普及せん

41) 参謀本部編『朝鮮役』59-60頁。

42) 参謀本部編、前掲書324頁。

43) 『近世日本国民史 豊臣氏時代編 朝鮮役』として、1935年民友社から刊行された。

44) 北島万次『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』(校倉書房刊、2002)、序章。

45) 徳富猪一郎『近世日本国民史 豊臣時代丁編』(民友社刊、1935)、9頁。

46) 徳富猪一郎、前掲書、306-309頁。

47) 中村栄孝「文禄慶長の役」『大日本戦史』3(三教書院刊、1939)。

とする大理想の下に起こった戦争」と規定している。つまり、大陸経営の論理で壬辰倭乱をとらえているといえる。⁴⁸⁾特に、日本軍の軍律が厳しく、朝鮮人に被害を与えないようにしたとして次のように述べている。

「我が軍は朝鮮諸道に行動を開始し、至る所で官吏の収容、庶民の慰撫、抗敵の掃蕩を行って治安回復をはかり、税を徴収し兵糧を備蓄して征明の準備に汲汲としていた。他方、産業の開発、文化工作にも努めて鋭意軍政の徹底を期した。」⁴⁹⁾

文化工作の例として国語普及運動という表題で記述している。このような記述が文献資料を証拠としてあげてなされているが、これは一部をもって全体を説明しようとする曲学阿世の学問といえる。中村は1969年に『日鮮関係史の研究』中巻で以上のような記述や表現を大幅に修正して出版した。

日本では、1945年以降、民族主義的な傾向から脱して人道主義的見地から壬辰倭乱を研究しようとする学者の中に、朝鮮と日本の史料を厳正に比較して合わせて利用している向きもある。⁵⁰⁾その具体的な例として、壬辰倭乱の時、日本軍の損失が40%以上に達した⁵¹⁾ことや、民衆生活を重視する捕虜⁵²⁾、義兵によって釜山、ソウル、平壤の拠点や占領地への軍糧補給に支障が出て日本軍が大きな打撃を被ったこと⁵³⁾、王陵の盗掘事件、戦死者の耳や鼻をそいでいく蛮行を犯した事実が明らかにされている。そして、「豊臣秀吉の朝鮮侵略」という客観的な用語を用いる傾向があらわれてきている。

4. 今後の望ましい両国の歴史認識

壬辰倭乱は日本と朝鮮の戦争であった。明国の軍隊は支援を行なっただけである。壬辰倭乱という用語は1945年以降日本の学者も用いている用語⁵⁴⁾で、国際学術会議でも合意された名称である⁵⁵⁾。しかし、客観的に見ると適切だとは思わない。今でも「倭城」や「倭寇」といった学術用語が韓日両国で使用されているが、日本という国家名称があるのに「倭」という名称を使うのは適切ではないと考える。日本では「文禄慶長の役」、「豊臣秀吉の朝鮮侵略」もしくは「豊臣政権の朝鮮侵略」と

⁴⁸⁾ 中村栄孝、前掲書、254-255頁。

⁴⁹⁾ 中村栄孝、前掲書、294頁。

⁵⁰⁾ これについては北島万次の『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』（校倉書房刊、1990）、に掲載された第1章「豊臣政権の朝鮮侵略に関する学説史的検討」56-61頁参照。

⁵¹⁾ 貫井正之「豊臣政権の朝鮮侵略と朝鮮義兵闘争」『秀吉・耳塚・四百年—豊臣政権の朝鮮侵略と朝鮮人民の闘い』（雄山閣出版、1998）、11頁。

⁵²⁾ (補註) 中里紀元『秀吉の朝鮮侵攻と民衆・文禄の役(壬辰倭乱)—日本民衆の苦悩と朝鮮民衆の抵抗—』上、下(文献出版、1993)。

⁵³⁾ (補註) 同上、490頁。

⁵⁴⁾ 17編の論文が表題に壬辰倭乱を用いている。日本側の研究史報告書の目録参照。

⁵⁵⁾ 2000年8月、オックスフォード大学で開催された韓国、日本、米国、英国、中国の学者が参加した国際学術大会で、公式名称を壬辰倭乱とすることに決定したと聞いているが、その学術発表論文集がまもなく刊行されるという。

いった用語も用いられているが、壬辰年という干支は韓中日3ヶ国が等しく使用しているので共同研究のためには‘壬辰戦争’または‘壬辰戦争’と呼ぶのがよいと考える。

ところで、当時の記録は日本側の記録と韓国側の記録に一日のずれがある。日本側の記録が韓国側の記録より一日早い。これを共同研究の場で解決するには、陽暦に換算して記述する方法がある。つまり、釜山での開戦日が、朝鮮側では4月14日で、日本側は綴じ暦で4月13日であるが、陽暦に換算すると1592年5月24日になる。

韓日歴史研究共同委員会では‘朝鮮役’や‘征伐’、‘出兵’といった用語は使用してはならないと考える。出兵という用語は朝鮮を日本国内と把握していた日帝時の汚染された用語だからである。

日本では壬辰戦争を日本史の過程上の重要な事件として扱っているが、韓国では突然の侵略という戦争史であるため、たとえその影響が大きいとはいえ韓国史発展の中心問題とは認識されていない。従って、韓日両国で壬辰倭乱を見る視角は自体が根本的に違っている。今後、韓国で壬辰倭乱は世界史的な戦争として把握する努力が必要である。門中の先祖を称えるための義兵顕彰の次元を超えて、戦争史は地域史の重要な研究として位置付けなければならない。

ところで、壬辰戦争を1945年以前の歴史認識に従って日本勢力の膨張として美化してはならないと考える。日帝期には秀吉の朝鮮侵略を日本の植民地支配に利用した。また、戦争の原因として明国の征服を目的としたという叙述は韓国側としてはどうても認められず、単なる戦争の口実と理解されている点において大きな違いがある。

壬辰倭乱を扱う視点としては、当時を生きた全ての人々の歴史として見る視点が必要である。支配層中心の歴史から果敢に脱しなければならない。局地的な戦闘についても勝敗云々ではなくその実像を明らかにする努力が必要である。壬辰戦争の歴史の実像を明らかにするためには、一方の記録だけを利用するのではなく、双方の記録を比較検討する方法が必要である。『朝鮮王朝実録』をそのまま利用する段階から抜け出し、徹底した史料批判を経た上で利用すべきである。これは日本側の研究でも同じことである。古文書史料だからといってそのまま引用するレベルを超えるべきである。古文書史料は特殊な状況を伝える資料であるので、これを全体化、一般化することについては慎重でなければならない。部分を全体と解釈することがあってはならない。つまり、過去の記録があるからといってそのまま引用する歴史学は止揚されるべきである。両国は文献実証主義の歴史学から敢然と脱皮しなければならない。壬辰倭乱を文献中心に把握しようとする歴史的理解を過つことが多いからである。

要するに、韓日両国での壬辰倭乱に対する今後の研究は、国家の発展のために国家主義的な観点から行ってはならない。また、自国の歴史を美化しようとする民族主義歴史観を放棄し、戦争で犠牲となった人々は国籍がどこであれ人道主義的見地から同等に検討しなければならない。歴史家は常に自分が属する国の歴史を公正に把握できていないのではないかと常に反省を怠ってはならない。

そして、今後どのような理由であれ戦争を未然に防ごうとする平和主義的観点から戦争史を研究しなければならない。人間尊重主義的観点が戦争史の基本観点とならなければならない。戦争が

ある国の影響だけでなく人間の歴史にどのような影響を及ぼしたかという見地から認識しようとする態度が重要であることを強調したい。

5. 壬辰倭乱の歴史的意味

(1) 戦争の勃発

壬辰倭乱は1592年に豊臣秀吉が朝鮮を侵略して始まった7年間の戦争である。明軍が参戦して国際戦になった。規模からいうと7年間の戦争に参加した日本、朝鮮、明の軍は70万以上になった。秀吉が分裂していた戦国日本を統一した後、朝鮮を対馬に朝貢する国と錯覚し、対馬島主に朝鮮国王の来朝を要求させた。朝鮮と日本の間の外交慣行を熟知していた対馬島主はこの問題を解決するために両者の間で厳しい調整を迫られた。対馬島主は独断で1587年に国王使を派遣して通信使の派遣を要請し、それ以降二度にわたり通信使派遣を要請した。

1590年、朝鮮政府は通信使を派遣したが、日本による侵攻を予想できなかった状況での派遣であった。帰国する通信使とともに朝鮮に来た玄蘇らは入京すると「假道入明」と通告した。これに対し、朝廷では防衛準備を命じたが民心の動揺を理由にすぐさま撤回させた。朝鮮政府の外交的対処は未熟極まりないものであった。日本国内の情勢把握にも積極的ではなかった。日本が明を討つとの情報を明に伝えるべきかをめぐって迷っていた。朝鮮が日本と通じているのではと明から疑われるのを恐れたためである。日本から送られた鳥銃に対しても関心を向けなかった。宣祖が通信使に尋ねたのは秀吉の印象に関するものだけであった。

戦国時代を統一した秀吉は、大名に検地令を通じて石高知行制を実施、大名の紛争を防ぐための惣無事制の実施、兵農分離の政策を通じて統治基盤を固めた後、朝鮮侵略を画策した。この頃、秀吉が明を討つと公言したのは国家的規模の軍役動員の口実であった⁵⁶⁾。ところが、秀吉が明を占領しよう考えたのは1585年に関白に就任した時で、これは家臣団の結束をはかるためであった⁵⁷⁾。日本での征明の野心は既に織田信長にも見られた⁵⁸⁾。これは急激に成長した軍事力の対内的表出であった。

16世紀の中ごろ西欧人から鳥銃や火薬を輸入したが、この新式武器は国内統一に大きな効果があった。大名に対する秀吉の権力は専制的であったのでだれも異を唱えることができず、反対意見を提示すると厳しい処罰が下された。秀吉は賤民から出世し、1585年に従一位の関白に上り、翌年には太政大臣の位に就き、太閤と呼ばれた。天皇だけが催すことができる宮中での茶会を主催し、天皇の権威を実質的に行使した⁵⁹⁾。秀吉は太閤として、日本の外交、軍事、国政を総括した。やがて関白は甥の秀次に譲ったが、秀次は秀吉の命令に従う操り人形に過ぎなかった⁶⁰⁾。

⁵⁶⁾ 北島万次『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』(校倉書房、1990)、95頁。

⁵⁷⁾ 北島万次、前掲書、14頁参照。

⁵⁸⁾ 堀新「信長・秀吉の国家構想と天皇」池亨編『天下統一と朝鮮侵略』(吉川弘文館、2003)、122頁参照。

⁵⁹⁾ 同上、115頁。

⁶⁰⁾ 北島万次、前掲書、351-363頁参照。

秀吉は大名に命じて、1591年10月に名護屋に城を築き、召集令を出して9個部隊、15万8千⁶¹⁾を朝鮮侵略に動員した。戦争の名分は明を討つので道を貸すようにというものであったが、これは口実に過ぎなかった。戦争を起した動機については、韓国学界では大名の勢力を削ぐためという説があるが⁶²⁾、その後研究が進んでおらずこれをそのまま定説のように受け止めている。韓 祐 功 は、日本側の原因として六つの点を指摘している⁶³⁾。しかし、その六点は時期的に変化していったことが確認できる。筆者は、秀吉の朝鮮侵略の原因について次のように考えている。

秀吉が唐と天竺を討つというのは、唐は漢字と儒教文明の中心地であり、天竺は仏教の発祥地だからである。天竺までも征服するというのは外交文書の作成を依頼した僧侶たちの考えが反映されたといえる。秀吉が考えていた天下には二つの意味があった。一つは統一した日本全体で、もう一つは全世界である⁶⁴⁾。自国を天下と認識するのは古代的な発想である。韓国でも高句麗、百濟、新羅の三国においてそれぞれが自国を天下と考えていた⁶⁵⁾。こうした古代的な発想は高麗朝の初期まで続いた⁶⁶⁾。

しかし、12世紀以降、宋と金に使臣として派遣された人々の見聞によって自国を天下と称することができないことが確認され、高麗人は天下という語を用いなかった。従って、自国を天下と称するのは古代的な遺制であろう。また、キリスト教に反対するため秀吉が「日本は神国」と考えたことと五山僧によって主張された神国論も古代的遺制といえるだろう。韓国でも古代国家の高句麗、百濟、新羅の始祖は天帝の後孫という観念が支配的であった。しかし、新羅の場合、天帝神の始祖と始祖妃の閼英の象徴である地神を崇拝する神宮を設立し、その後国家次元で崇拝していたが、9世紀頃に唐の宗廟制度が導入されて、神宮は衰退した。三国の始祖が天帝の後孫であったとする王室の神聖性は合理的な儒教文化の進展により高麗時代に克服されたが、12世紀に李奎報によって書かれた「東明王篇」や13世紀までに一然禪師によって書かれた『三国遺事』などによって継承されている⁶⁷⁾。

秀吉も国外に唐や天竺という文化先進国があることを知っていた。国内を天下と称しつつ、文字通り天下、つまり全世界を統一しようとするなら儒・仏の発祥地の唐と天竺までも統一しなければならぬと考えた。この考えは、1592年、朝鮮侵略が破竹の勢いで進んでいる時に表明された。し

⁶¹⁾ 韓国側では従来20万以上の軍隊を動員したとしていた。しかし、これは正確ではない。初期に投入された軍隊は13万7千2百である。国史編纂委員会刊『韓国史』12、1978、284頁参照。後日、後方支援部隊として後続部隊9番隊と10番隊の1万8百が投入された。

⁶²⁾ 韓 祐 功 「壬辰倭乱の原因に関する検討—豊臣秀吉の戦争挑発原因について—」『歴史学報』1(1952)、参照。

⁶³⁾ 韓 祐 功、前掲論文。これには、1) 豊臣秀吉が戦争狂であったという耽病説、もしくは個人的な功名心、2) 領地を与えられなかった大名の不満を解消するためという説、3) 豊臣秀吉の征服欲だったとする説、4) 領土拡張説、5) 明との勘合貿易再開のためとする説、6) 大陸を支配するという征服説と整理されている。以来、日本での壬辰倭乱研究の成果を整理した研究業績としては、金子文子「壬辰倭乱に対する日本の視角変遷」『歴史批評』46号(1999)、に紹介された。

⁶⁴⁾ 日本の国内統一を天下の統一と表現するのは誤りと考える。例えば、具体的な内容叙述では「全国の統一」と表現しながら、書名は『天下統一と朝鮮侵略』(吉川弘文館、2003)としたことを挙げることができる。

⁶⁵⁾ 盧泰敦「5世紀金石文に見える高句麗人の天下観」『韓国史論』(ソウル大学校、1988)、参照。

⁶⁶⁾ 「大赦天下」という表現が高麗朝の実録に記されているが、高麗史編纂過程でこれは「大赦境内」と改められたことが、世宗実録を通じて確認できる。鄭求福『韓国中世史学史』II(景仁文化社、2002)、42頁参照。

⁶⁷⁾ 鄭求福『韓国中世史学史』I(集文堂、1999)、78-82頁。

かし、秀吉は明の領土や人口がどのくらいか、天竺までの距離がどのくらいかについて正確には把握していなかった。秀吉は日本国内を統一する過程で、次のような攻撃目標を宣言してすすんで降伏するよう誘導した。この手法が琉球と朝鮮にも適用され、明と天竺を討つという妄想を抱いたのである。もし、秀吉が本当に明を征服しようとしていたなら事前に宣言しないはずである。朝鮮を攻撃して占領した後に宣言しても遅くはなかったであろう。朝鮮において平壤を占領し咸鏡道まで大きな抵抗なく成功を収めたので、明の征服やその後の分割構想が現れてきたのである⁶⁸⁾。

従って、秀吉が明を討つと公言したことはあっても、朝鮮侵略を明征服のための第一段階であるとか、朝鮮との戦争ではなく明との戦争であると認識⁶⁹⁾するのは真の歴史理解とはいえない。日本国内の土地を与えられなかった武士に領地を与えて不満を解消しようとして朝鮮を侵略したという動機説も妥当ではない。また、韓国側で叙述されているように、大名を戦場に送ってその勢力を抑えようとしたという説も妥当ではない。勘合貿易を再開しようとしたという説も1593年の明との講和会談の過程で出てくるが、根本的な動機とはいえない。日本の領土を拡張しようとしたという説も、講和会談の中で韓国南部の四道分割論に現れるが、根本的な朝鮮侵略の動機とはいえない。

秀吉は卑しい身分から出世し、戦争での勝利を重ね、そして戦争を行う過程で死んだ。戦争で一生を終えた人間である。秀吉が朝鮮を侵略した本当の動機は止まるところを知らないその戦争欲にあると解釈するほかない。戦争を先頭に立って直接指揮して戦ったわけではない。朝鮮での戦況が思われないと聞くと直接海を渡って行くと公言したが、四度も延期され、ついには実現しなかった。徳川家康と老母が引き止めたためというが、実は国内政治に不安があったためと考えられる。出征軍の作戦を総指揮する総大将も任命しなかった。これは国権の集中を懸念したためと思われる。自分が各将軍に直接指示した。自分の命令によって兵が動くのを喜んでいたといえる。戦争に出た兵たちの苦痛など考えもしなかった。当時、秀吉に会ったフロイスが記した「日本史」の記述によれば、秀吉は敏捷で、狡猾、そして残忍な人間と評されている。

また、明らかなことは、秀吉が朝鮮を対馬に朝貢する国程度に軽視していたことである。よって、朝鮮侵略は対馬島主による誤った情報提供にも原因があると考えられる。日本で城攻めを決めたらむこうから恭順してくるよう、朝鮮も城一つ落とせばその地方一帯が服属するものと錯覚していたのは明らかなことである。

(2) 戦争の経過

戦争初期は、陸戦で大規模な日本軍の攻撃に対して朝鮮軍は戦争らしい戦争ができず惨敗した。その理由としては、そうした大規模な侵略を予想できなかったことや、戦争を知らず平和が長期間続いていたことが挙げられる。全人民が山に避難したことについて、清野作戦を取ったというが、これはどうしようもなくそうなったのであって政策として行ったわけではない。

⁶⁸⁾ 北島万次、前掲書、95頁参照。

⁶⁹⁾ 池内宏がその代表的な学者で、その影響は弟子の北島万次にも強く現れている。これは、北島万次『豊臣政権の朝鮮侵略』4-15頁、および『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』第2章「豊臣政権と東亜細亜世界」参照。

陰暦4月14日(陽暦5月23日)⁷⁰⁾、釜山鎮が陥落したが、朝鮮軍は地形を利用した防御ができなかった。鳥嶺や漢江のような地の利を活かせなかった。戦争が勃発したとき、朝鮮軍は将帥が文官で、中央の常備軍はほとんど存在していなかった。

日本軍は鳥銃を携帯し、朝鮮軍は弓矢を用いたので、接近戦では日本軍が優勢であった。しかし、朝鮮軍も城を守るのに必要な銃筒類の大砲があった。武器の優劣よりも戦意のほうが問題であった。朝鮮軍の指揮官が文官の守令で、彼等は防御するどころか逃亡してしまった。城内の倉庫を燃やして住民を山に避難させた。その結果、農作業ができず、翌年(1593年)には食糧不足や伝染病に見舞われて多くの人民が亡くなった。

宣祖は4月30日(陽暦6月9日)、首都を捨てて播遷した。日本軍は抵抗をほとんど受けずに進撃し、5月3日(陽暦6月12日)、ソウルを占領した。5月13日頃、加藤清正と小西行長はソウルを出発して14日には臨津江を越えて江原道、開城に進撃した。その頃、朝鮮各道で徴収するための租税について記された文書がある⁷¹⁾。これは、今後将士らが徴収するという意思を表明したものと理解される。それは、未だ占領していない地域である平安道、咸鏡道、全羅道、江原道の租税量が記録されており、また加藤清正や小西行長が咸鏡道と平安道を担当していたが、咸鏡道が207万1086石、平安道が179万4186石と非常に多く設定されているからである。

一方、朝鮮軍は5月7日(陽暦6月16日)、李舜臣が玉浦海戦で日本軍に対して最初の勝利を収めて日本軍の全羅道進出を阻止したが、この勝利によって朝鮮軍は日本軍を撃退できるとの希望をもつことができた。6月13日(陽暦7月21日)、日本軍は平壤城を占領し、加藤清正と鍋島直茂は破竹の勢いで咸鏡道地方を占領した。この時、近衛兵を募集する任を帯びた臨海君と順和君の二王子が捕らえられた。陰暦8月末頃までには豆満江まで進撃した。

しかし、日本軍は予想していなかった義兵による攻撃を受け始めた。4月20日(陽暦5月30日)に全羅道淳昌で兪澎老⁷²⁾が、4月22日(陽暦6月1日)に慶尚道宜寧で郭再祐が義兵を起したのを始めとして、慶尚道、全羅道、咸鏡道など諸道各地で義兵による反撃が始まった。義兵の規模は1000人前後で、7年間の戦争中に組織された義兵の数は約2万6千人と確認されている⁷³⁾。全国各地で義兵が起り、日本軍の前方、後方から反撃した。義兵は郷土の地理に明るく、地の利を活用して遊撃戦を行って、日本軍に大きな打撃を与えた。義兵は日本軍の戦線を間で遮断したため、日本軍は軍糧不足に悩まされた。そのため現地でも略奪して調達するほかなかった。また、李舜臣による海戦の勝利によって海路を通じた軍糧の輸送も遮断された。

明軍の来援も日本軍の侵入を阻む大きな力となった。明軍が参戦した理由は、日本軍の侵攻を

⁷⁰⁾ 日本の暦では4月13日。陰暦に1日違いがある。

⁷¹⁾ 北島万次『豊臣政権の朝鮮侵略』(吉川弘文館、1995)、52-53頁。この文書の名称は「高麗国八州之石納覚之事」となっている。1592年に秀吉が加藤清正に5月16日付で送った指示内容に従って兵糧を調達せよとの命令に従ったもの。道別に担当将士と納付する石数が記録されているが、全部で819万6186石となっている。しかし、実際の各道の合計は1191万6166石である。合計がこのように合わないことについて、日本ではまだ言及されていない。これは、実際の租税量ではなく目標だったと考えられる。今後研究が必要である。

⁷²⁾ 趙援来『壬辰倭乱と湖南地方の義兵抗争』(アジア文化社、2001)、9頁。

⁷³⁾ この数字はソン・ジョンホンの「壬乱の勃発と経過」『韓国史』29(国史編纂委員会刊、1995)、44-45頁の表2から筆者が計算したもの。これは官軍の4分の1を越える。

朝鮮で阻止して自国に及ばないようにするためであった。チョ・スンフンは5,000人を率いて平壤城を奪還しようとしたが敗北して帰還した。李如松は4万人を率いて1593年に平壤城を奪還したが、碧蹄館戦闘で敗れ、その後戦意を失った。しかし、1592年陰暦8月27-28日の延安戦闘で6千の日本軍を撃退した。また、1593年2月の幸州城戦闘でも日本軍を退けた。この敗退で日本軍は4月、ソウルから撤退することになった。

日本軍がソウルから敗退したのは、予想していなかった厳しい寒さや飢え、戦死による兵力の減少、軍糧不足、厭戦気分の高まり、民衆によるゲリラ戦などが原因であった。撤退の名分として明側と講和会談を行った。また、1592年7月頃、全羅道に進撃した日本軍を郭再祐と権慄が防いだ。そして、10月初めの晋州城戦闘では金時敏将軍が3万の日本軍を撃退したことで、李舜臣の水軍の勝利とともに穀倉地帯の湖南地方を確保できた。全羅道は朝鮮軍の軍糧供給地となった。

(3) 講和会談

壬辰倭乱における講和会談は非常に複雑なので全過程を紹介することは不可能である。よって概要を整理することにする。日本軍は侵攻した初期から和・戦両面作戦を取った。最初の講和交渉は日本と朝鮮の間で行われたが、日本軍の完全撤退を主張する朝鮮側と明を討つために道を開けるよう要求する日本側の間では講和は成立しなかった。平壤城で明の沈惟敬と小西行長の間で講和会談が進められながらも、戦争は継続していた。朝鮮の割譲論を主張する加藤清正は交渉から除外された。小西行長は1593年5月、名護屋に帰り秀吉から七か条の交渉案を託された。その際、沈惟敬も同行して秀吉に会った。しかし、朝鮮での両者による講和会談は本国からの承認を受けないうまま進んだ。小西行長は明軍を撤退させることを目的としていた。一方、沈惟敬は日本軍の完全撤退を目指していた。明側からは日本国王が降伏文書を上げることや秀吉を日本国王に冊封することが、日本側からは封貢の許可、明皇帝の皇女を秀吉に降嫁することなどが主張された。双方にとって本国に伝えることが困難な問題は伝えられなかった。そして、小西行長は降伏文書を任意に作成して明皇帝に謁見する使節を派遣し、沈惟敬は日本国王使を冊封する使臣を明から派遣することにした。冊封使の正使・李宗誠が日本軍陣所において講和会談に何らかの歪曲が加えられたことに気付いて脱出したため、正使としての任務を投げ出してしまった。日本に赴いた沈惟敬は歓迎どころか冷遇されて戻ってきた。その結果、沈惟敬は死刑に処せられたが、小西は偽った罪を戦場で償うようにとの処置が下された。

講和会談が進められている間にも、蔚珍の西生浦で加藤清正軍を包囲するなど戦闘が行なわれ、秀吉は第1次晋州城敗北に対する報復として殺戮を命じた。1593年6月、全軍約9万人を動員して城内の全員を殺害するという蛮行を犯した。明軍が協力しなかったことやその妨害によって朝鮮の支援軍が傍観する中で落城した。この晋州城戦闘での残虐性は二つの王陵の盗掘とともに、朝鮮国王・宣祖と朝鮮国民に日本軍に対する強い敵愾心を抱かせる最も重要な事件であった。

講和会談によって1594-96年は戦争は小康状態となった。1596年、日本軍は南海岸に18の城を築いて軍の一部を残して撤収し、明軍も1万6千人を残して撤収した。

(4) 丁酉再乱

名護屋に赴いた沈惟敬らによる講和が決裂すると、1597年1月15日、秀吉は約14万の軍を動員して再度侵攻を試みた。このとき既に明を討つという名分はなくなり、全羅道地域を占領する作戦に代わった。明からも即時に派兵が行われた。日本軍は水軍が敗北したのを始め、朝・明連合軍によって9月5日、稷山戦闘で敗北し戦意を失って海岸地域に後退した。9月10日、鳴梁で李舜臣が日本軍を破った。

丁酉再乱では日本軍の作戦と戦略に変化が見られた。第一次侵攻の際に各指揮官が個別に進撃したのとは異なり、合同作戦を行った。これは全羅道地域の地理に関する情報が全くなかったことが主な要因であったと考えられる。1597年11月頃になると、日本軍は朝・明連合軍に押され、南海岸一帯に築いた倭城に立てこもるだけとなった。戦争を起こした張本人の秀吉は1598年8月18日に死亡した。秀吉の撤退命令が伝えられたのは9月中と考えられる⁷⁴⁾。秀吉の死如何にかかわらず日本軍は既に敗北していた。

(5) 戦争の性格

壬辰倭乱直前の朝鮮は、旧体制の残滓や士林派内部の政争から引き起された葛藤や社会経済的な乱脈相が重なり、総体的な危機に直面していた。それに加え長期間平和が続き社会全般に戦争に対する無関心広がっており、「危機的状況」は深刻な様相を帯びていた。壬辰倭乱が起った16世紀後半は朝鮮を含む東アジア全体が変動の渦に巻き込まれていった時期であった。さらに、朝鮮は1589年の己丑獄事以降、王権と臣権との間の微妙な緊張の中で党派間の政争が続き、朝廷は当時の日本を始めとする東アジア周辺で現れていた情勢変化を能動的に把握できなかった。

当時の東アジア海域にはポルトガルとスペインが鳥銃や宣教師を前面に出して進出してきた。彼等は中国と日本、中国と南米間の仲介貿易を主導しながら東アジアにおける情勢変動の触媒の役割を果たしていた。鳥銃と貿易に象徴される西洋勢力との接触は日本の軍勢力と富を増大させ、秀吉の大陸征伐への妄想もその基盤の上で形成されたのである。

明はその頃、張居正の改革政治によって実現された短期間の‘中興’の機運が後退し、政治・社会経済的な乱脈相を呈していた。こうした中、壬辰倭乱の発生を契機に朝・明関係は新たな転機を迎えた。明軍が直接朝鮮に参戦した。明軍の軍糧は、初期においては自前で調達したが、その後朝鮮が担当しなければならなくなり、その上、朝鮮軍の作戦指揮権までも制限された。

地理上の発見による西洋人の東洋進出は世界的な貿易ルートが形成され、これを通じた鳥銃の伝来により日本は戦国時代に終止符を打ち、新しい社会が形成された。つまり、秀吉は日本国内を統一し、太閤検地令、石高知行制、刀符令、度量衡の統一、惣無事令、兵農分離などの法制や政策の実施で国力の極大化を図り、秀吉の専制権を確立した。さらに、秀吉の無慈悲な専制的性格のため大名はどんな命令でも逆らえないようになった。

⁷⁴⁾ 秀吉の死後の問題に対処した5大老が加藤清正に撤収を命じた文書が9月5日に作成された。徳富猪一郎『近世日本国民史 豊臣氏時代己篇 朝鮮役』下巻(明治書院、1935)、673-674頁。10月初めから小西行長は明の劉綎に脱出のための交渉を試みた。

壬辰倭乱は長期間にわたった国際戦争であった。朝鮮、明、日本軍の他にもタイ、琉球、スペイン、ポルトガルが係わった国際戦で、参戦した兵の規模も世界的であった。日本軍は陸戦では破竹の勢いだったが、海戦では惨敗であった。総体的には戦争の結果は勝利した国家も敗北した国家もない戦争となった。

両国の軍事体系は当時の両国の政治的、文化的状況を反映する。朝鮮の軍令は、国王、四道都體察使、都元帥、各部隊の指揮官の順に行われた。特に、作戦指揮は都元帥のもとに行われた。しかし、作戦指揮において明の将軍から統制を受けていた。日本は、秀吉が直接各将軍に軍令を下し、作戦指揮は各将軍が担った。特に、日本の場合、諸部隊を総括・指揮する一元的な体系ができていなかった。日本出征軍の総大将・宇喜多秀家には各部隊長を統率できる裁量権が全く与えられていなかった。ただ一度だけソウルで開かれた将軍会議を主宰したにすぎなかった。

戦争は放火や破壊、疾病をもたらした。日本軍と明軍にも大きな被害があった。しかし、最も被害が大きかったのが朝鮮であった。日本には、秀吉が厳格に軍律を守るようにこの命令を出したので民衆には被害がなかったかのように理解している論文もあるが⁷⁵⁾、これは初期に文書上に見られる表現であり、非難した朝鮮民衆を懐柔しようとする目的から発せられたものである。日本軍は、王陵の盗掘はもちろん民家の略奪、殺人、放火、強姦、捕虜などの蛮行を犯したことが朝鮮側の日記資料などに生々しく記録されている。明軍もまた大きな被害を受けた。日本軍は二度にわたり30万の軍が、明軍は10万以上、朝鮮軍は30万近くが参戦した。

1592年陽暦5月に始まった戦争で、朝鮮側は清野作戦を用いて避難したため、翌年と翌々年には凶作となり、病気が流行して死にゆく人々が道にあふれた。韓国史上例のない食人という惨状が見られた。日本軍のうち戦争や寒さのために朝鮮側に投降した者は約1万人、戦死者は5-6万人といわれる。倭乱中に日本に連行された朝鮮人は約9万人と推定される。降倭を通じて銃砲の技術、軍事技術の伝習、戦闘への投入など戦功を立てた者には官職を与えて褒賞した。壬辰倭乱は日本の‘文化略奪戦争’とも評価されている。物品だけでなく人間や家畜までも略奪の対象とした点において倭寇的な性格を帯びており、従って‘国家的規模の倭寇’と見ることができる。

(6) 戦後処理と戦争の影響

主戦場となった朝鮮の被害が最もひどかった。ソウルの景福宮、昌徳宮が焼失し、民心が離反して民乱も発生した。1592-3年の避難によって農土が荒廃し、1593-4年に深刻な凶作と伝染病の蔓延によって多くの人々が道端で死に、死臭がただよった。戦乱によって150万結の土地が50万結に減少した。戦後の復興策として軍營の新設や租税制度の改革などが実施された。こうした復興策はその後数十年間にわたり実施された。一方、戦争で多くの民が未曾有の大移動を行った結果、奴婢が逃亡したため奴婢が急激に減少した。これは、両班が奴婢の移動を共同で抑えていた体制が崩れたともいえる現象であった。

また、日本軍に捕えられた9万人余りの捕虜はイタリアなどに奴婢として売られたり、日本で奴婢

⁷⁵⁾ 中村榮孝「占領地の軍政」『日鮮関係史の研究』中(吉川弘文館、1969)、127-137頁。

身分に転落したりした。しかし、朝鮮政府の歓心を買おうとしていた対馬島主による捕虜送還や、1604年に対馬に赴いた四溟大師・惟政が京都に行き捕虜として抑留されていた1,391人の送還など、59回にわたって約7,300人が送還された⁷⁶⁾。これに比べて日本人の送還はほとんどなかった。天主教の神父や信者が日本軍に同行して朝鮮に来たが、朝鮮に天主教を伝えることができなかったのは戦乱中の日本の影響をうかがい知る基準の一つといえる。

三カ国の人的、物的交流が大規模に行われた。日本から朝鮮に煙草や唐辛子などの新しい作物が伝わり、日本には朝鮮から陶磁器、印刷術、儒学が伝えられた。

戦争によって財政や軍事的な損失を被った明は新たに満州で興ったヌルハチによって滅び、明・清が交替した。明の支援を受けた朝鮮は明を支援したという理由で二度にわたり侵入を被った。清による中原占領は、朝鮮社会がさらに徹底的に性理学名分論に傾倒する結果をもたらした。国家的に見れば、以降300年間異民族の支配を受けた中国人が最も被害が大きかったといえる。日本は、秀吉の体制が崩壊し、徳川幕府に実権が移った。徳川幕府は朝鮮との親善政策を追求し、通信使が相互に行き交う平和関係が約200年間続いた。壬辰倭乱は勝者も敗者もなく終わった残酷な戦争であった。戦争は放火、殺戮、強姦、捕虜、戦争への動員、賦役など、韓・中・日の民衆生活を圧迫し、惨めなものにこただけであった。戦争狂の豊臣秀吉が引き起した戦争の惨禍を償うことはだれもできない。秀吉に対して専制権力を掌握した国民的英雄と見る視角は、民主社会では必ず止揚されなければならない。

6. 結論

壬辰倭乱に対する韓日両国の歴史認識は、近代歴史学以降大きく異なっている。双方は、民族主義歴史学のために国民意識を形成することに汲汲としていたと指摘せざるを得ない。しかし、近代歴史学を順調に研究できた日本の場合、壬辰戦争は19世紀末以降1945年までの約50年間、国民意識の形成のために国粹主義的観点から利用された。こうした研究成果は、1945年の日本の敗戦以降も受け継がれ研究されている。

もちろん、1945年以前の歴史学に対して深く反省をしている学者もいるが、日本史研究者のなかには全く反省していない者もあり、さらに政治家の中には日帝下の歴史認識をそのまま持ち続けている向きも多い。過去になされた歴史研究は、それに基づいて行なわれた教育によって現在も人々の意識の中に残っていることを示す例がしばしば見られる。

一般国民にとっては、現在の歴史学者の研究成果よりも過去に自分が習得した歴史的知識の方が歴史意識に作用する。神社に設けられた説明書きは日本国民の歴史意識を窺うことができる良い資料である。対馬厳原市の八幡宮神祠の説明書きには神功皇后が新羅を征服した後、最初に足を踏み入れた場所との説明がある。神功皇后に関する記事は作られたものであることは、現在、歴史学者によって明らかにされている。しかし、日本書紀の説話風の記述が、今でも日本人の社会

⁷⁶⁾ 米谷均「17世紀の日朝関係における朝鮮被虜人の送還」『四溟堂惟政』(知識産業社、2000)、331-334頁の表1参照。

教育資料としてそのまま活用されている。このように日本の国民を覚醒させるために、そして日本の国家発展のために過去における侵略の歴史を美化したり隠蔽することは決して望ましいことではない。

さらに、第2世代の教育のための教科書は、未来志向的で健全な歴史観に基づかなければならない。韓国の場合には国定教科書であるため、外国に関連する問題は相手国にひどく嫌悪感を与えるような表現は節制されている。一方、日本の場合は検定であるため、外国に対して嫌悪感を与えるような自国中心の表現を節制するのが容易ではないだろう。韓日歴史研究共同委員会が発足したのは日本の教科書問題が発端になった。

特に、壬辰戦乱に対する日本の教科書記述のうち、日帝時代に朝鮮を占領して朝鮮を自国領土の一部と考えて使用した‘出兵’という表現や、壬辰倭乱に関する韓国側の研究成果を完全に無視して国民の民族意識を昂揚させようとする民族主義的歴史観は、人類の永遠で遠大なる理想、すなわち戦争を防いで無辜の人民が二度と災難に遭わないように、平和主義的歴史観に改めなければならない。歴史によって国民意識を強化しようとする意識から敢然と脱することが、長期的に見れば自国の利益になるだろう。

討論記録

主題：「壬辰倭乱に対する韓・日両国の歴史認識」(* 主題は分科会議での発表時のもの)

発表者：鄭求福委員

○日時：2003年6月14日 10時—12時30分

○場所：対馬(長崎県) 厳原町文化会館

○参加者：

(日本側) 吉田光男委員、田代和生委員、六反田豊委員、北島万次協力者、
伊藤幸司協力者、米谷均協力者

(韓国側) 孫承喆委員、趙琬委員、鄭求福委員、韓文鍾研究員、朴哲晄研究員、
張舜順研究員

吉田 まず討論の方法についてですが、今日お話になった内容についてだけですか。あるいはこの原稿の内容もすべて検討の対象にしますか。

孫承喆 この論文は完成したものではないので、完成は来年の3月までか5月までですし、討論の内容を踏まえて論文を完成することにしていきますので、自由に話すようにしましょう。

田代 日本側では日本語版の資料がありますので、これを基に読んでそれぞれの反論や意見を言うと思います。

吉田 細かいところ、大きなところとありますが、まずは大きなところから行きましょうか。全体的な構想というところで、日本側のほうで何かご意見ありますでしょうか。あるいは発表された内容で、日本の研究者になかなか理解できないところもあると思いますから、その中から入っていったら、その後具体的な記述というところで、質問、意見の交換をしたいと思います。

六反田 よろしいでしょうか。大変手際よく日本と韓国の壬辰倭乱、文禄慶長の役に関する研究を整理されて、今後、この研究のあるべき姿を提示していただいたものだと思います。ただ、今のお話、あるいは書かれたものを読んだだけでは、狙いが分からないところがあったので、補足の説明を少しお願いしたいと思います。

それは、今日配っていただいた韓国語版の2頁(最終報告書490頁)目に書いてあるのですが、つまり、ここで扱っている研究がどうして個別論文ではなく、単行本に限定したのかということの理由がまず1つ、それからもう1つは、その際に日本での研究は、どうして1945年までを主体にして、韓国では1980年までを主体にしているか、つまり、両国の壬辰倭乱に対する歴史認識を比較し、この2頁のところでもその両者の認識には共通点と差異点がたくさん見えてきたと言っているらしいんですが、その際、対象の年代をずらして

いるのは、何かお考えがあってそうしたのか、これを読んだだけでは分からないので、分かりやすく説明していただきたいと思います。

鄭求福 はい、お答えします。六反田先生の、なぜ単行本についての研究だけを扱い、論文については研究しなかったのかという質問に対するお答えです。この研究は、国民や歴史学者の歴史認識に対する問題を扱うことに焦点があります。したがって、個別の論文というのは学者の研究においては継続的な発展の基礎になりますが、一般国民に対してはあまり影響を及ぼさないと考えました。

2番目の質問についてお答えします。この問題は、私が本日の発表で明らかにしましたが、日本の研究は1945年までを主に扱い、韓国の研究については、1980年代までを主に扱った理由は、韓国で1945年までを、同一の時期を扱う場合には、韓国での研究成果はほとんどありません。その理由は、韓国は1945年までは日帝の植民地支配下に置かれていたので韓国史を研究する自由な雰囲気ではなかっただけでなく、歴史研究が一種の独立運動とみなされたため海外に逃避して研究するような状況でした。

さらに、1937年に日中戦争が始まってからは、韓国史の良心的な研究者たちは研究をやめてしまいました。それは、自分の良心に基づいた論文を発表することの出来ない、不自然な状況だったからです。しかも、日本側と戦った壬辰倭乱という戦争について韓国人の見地から研究するということは想像もできませんでした。したがって、韓国で壬辰倭乱を含めた韓国史全般の近代的な研究が始まったのは1945年以降からとみななければなりません。

しかし、日本での1945年までの研究傾向と、韓国における1980年代までの研究は、たとえ时期的なずれはありますが、民族主義的な歴史観に基づいたという共通点を見出すことができます。以上です。

六反田 ありがとうございます。確かに先生がおっしゃるように、韓国の研究が1945年以前においては、日本の植民地支配を受けていたということで、ほとんどやりたくても出来ないというか、非常に厳しい条件にあったということは、おっしゃる通りだと思いますし、そういうことは多分この中にもお書きになっていたと思います。

ただ、日本側の研究を1945年を主体に扱うということについて、私はまだ少し疑問があるのは、この中にも書かれていますけれども、1945年以前は日本は帝国主義的な時代にありますから、しかも、日本ではそういう中で近代科学としての歴史学において、文禄慶長の役の研究が本格的に始まったということで、もちろん、1945年以前を扱わなければいけないというのもまさにその通りだと思うんです。ですから、1945年以降にもっと戦前の研究を乗り越えようとする研究がたくさん出てきていて、そういう研究についてもやはり積極的に取り上げていただいた上で比較をしていただいた方が、研究の現状に基づいた壬辰倭乱のこれから先を見据えた研究史の整理、歴史認識の共通点と相違点をお互いに見出していく時には意味があったのではないかなと思います。もちろん、1945年以前を扱ってその上に、現在の日本の研究がありますから、そこは無視しろというわけではなく、

その上で、では今、日本はどうなっているのかというところをもう少し先生なりに整理して示していただいたほうがよかったかなと思うのであります。

鄭求福 それについてお答えします。私の論文では、主に1945年以前の研究成果を扱っていますが、1945年以降の、前向きで、発展的、反省的な歴史学、すなわち北島先生の御著書3冊を私は全部読みましたが、それについても言及しております。北島先生の「豊臣秀吉の朝鮮侵略」という本は、現在の韓国人の研究傾向や韓国人にもほとんど不満ない程客観的であり、相当に公正な立場から書かれたものだと思います。

壬辰倭乱について、日本では「朝鮮の役」や、「文禄・慶長の役」と称されていますが、「豊臣政権の朝鮮侵略」「豊臣秀吉の朝鮮侵略」と表現されているのは、日本国民に対して相当な影響を与えるだろうと思います。しかし、このような北島先生の歴史認識が、日本の一般国民の認識として広がるまでには数十年はかかるだろうと思われまふ。日本史を研究する学者たちがすべて北島先生の説にこたえているとは思いません。

この日韓歴史研究共同委員会が設立されたのは、日本で戦前の歴史認識によって書かれた教科書をめぐる問題に起因しています。したがって、こうした点を新しく認識しなければならないという点で1945年までの内容を扱っておりますが、1945年以降についても、その以前の歴史研究について反省し、新たな角度から書かれた研究者の研究を紹介しています。具体的には今日お配りしました論文韓国語版の13頁、その下段の部分で簡単に紹介しています。

六反田 どうもありがとうございました。先生のお考えがよく分かりました。今、13頁のところが出てきましたので、そこで1つだけ申し上げておきたいのですが、確かに1945年以降の研究についてここに挙げてありますが、注の48番はいいんですけども、そのあとの「(韓国語)民衆の生活を重視する被擄人の研究や…」、これは具体的な研究があると思うのですが、注では紹介されていないので、論文にする時には具体的にどういふ意見・研究があるのかということ注につけていただきたいと思ひます。

鄭求福 最後の御指摘につきましては、今後補っていきますが、この研究は研究史的な、全体的な研究ではありませんので、先生の御指摘については今後補完していきたいと思ひます。この論文には、先に述べましたように、日帝時代の国粹主義的、民族主義的歴史観の実体を明らかにしようという点に主な目的があることをご理解ください。

吉田 そのほかにもたくさん話がありますから、今の問題についてはこれで終わりにいたしまして、鄭求福先生のお話の中で、何度も取り上げられました北島先生、何かご意見は。鄭求福先生のお話の中で何度か名前が上がったから北島先生から一つご意見をお願いします。

北島 今、いろいろ聞きまして、質問というよりもむしろ意見なんですけれども、7点ぐらいあります。1つは、壬辰倭乱というか、この戦争の呼び方の問題なんです。ちょっと黒板使います。石原道博という人がいて、「文禄・慶長の役」塙書房、刊行の年次はちょっと忘れちゃったけれども、私の本には書いてあります。この中で呼称が「朝鮮征伐」から「文禄慶長の役」に

なぜ変わったかという問題がある。それは要するに、韓国併合、石原さんはこれを契機にして朝鮮人も日本人になったのだから、征伐という言葉はやめようということになった。このように石原さんはいっています。池内先生が「文禄慶長の役」という名称を用いたのは、これらの風潮から来たんだと思います。こういう考えの中からこの文禄慶長の役と一般的になったので、池内先生はそういうように名付けたと思うんです。

田代 それは研究史に既にも書いていますから。

北島 わかりました。

吉田 それは橋本さんが研究史整理の中で明確に書かれていることですね。

橋本 北島先生が書かれたことです。

北島 わかりました、では次の問題。池内さんの理解の仕方なんです。池内さんの記述は日本語版だと5頁の下のほうで、韓国語版は7頁のところ(最終報告書493頁)です。そこで日本語版で言うと、「古来より我々より強い存在だったことを誇示することで韓末以降この地の不法支配を正当化しようとしたのである。その代表的な例として、南満州鉄道会社調査部の支援のもとで行なわれた池内宏の『文禄慶長の役』を挙げることができる」というふうにあるわけです。それから、次は日本語版の8頁(最終報告書495頁)で、韓国語版だと…。

吉田 どういう記述でしょうか。「文禄慶長の役」別編ですか。

北島 「壬辰倭乱の研究において学問的に重要な画期となった著書は、池内宏の『文禄慶長の役』と参謀本部から出た『朝鮮の役』という、韓国語版だと10頁です。そこで池内さんについて、「正編は全体が壬辰倭乱の背景についての説明であるが、その歴史認識は英雄主義的歴史観であった」とこのように書かれている場所、それから次のところへ行きますと、日本語版、9頁4行目(最終報告書496頁)ですが、「池内の歴史認識は日本における韓国の植民地支配を当然視し、永久支配を画策した植民論の展開といえる」と。

吉田 韓国語版の11頁、第2パラグラフです。

北島 「池内の研究法がたとえ文献史料の実証という面ではいささかの寄与があったとはいえ、その歴史認識は否定しなければならない」とこのように書かれている問題で、ここは私とちょっと意見が違うんです。1つは、池内さんはいかにして朝鮮征伐じゃないかということを論証したんです。この正編第一で。それは、学説のほうでも整理してあると思いますけれども、それ以前に東大で辻善之助、田中義成、これは文献目録に出っていますが、その人たちが学問の上で朝鮮征伐史観を打ち出している人たちです。その方が言っているのは、秀吉が明との貿易を再開しようと考えて、朝鮮に斡旋を依頼したところ、朝鮮がこれを断ったので朝鮮を征伐したというのが、それまでの朝鮮征伐史観の一番ポイントだったわけです。池内さんはそうではなくて、明征服であるということをはっきり出したところに、正編第一のポイントの重要な点があると思うんです。

橋本 前提として、先に配られている研究史整理の辻善之助、から池内宏までのところを確認してもらって、その上で先生がお話になりたいことを…。

吉田 これを前提として話を進めているはずなんです。

- 橋本 でももう一度…。
- 吉田 これは全部説明がすんだことなんです。
- 田代 歴史的な事実とだれがどういふふう理解しているかというのは、もう既に研究史の方にまとめて書いてありますので、今、北島先生がおっしゃっているのは、それをお読みいただければ、池内さんの言っている主張、その前の主張とどう違っているかというのが書いてありますので、そこは飛ばします。
- 北島 次、日本語版の9頁の真中辺り(最終報告書496頁)で、『文禄慶長の役』別編は」というところ、これは韓国版の11頁。ここで、咸鏡道租税牒の話が出ていますでしょう。これについて、「ここに見られる池内の歴史観は正編のそれとは異なるように見受けられるが、実は同一線上に立っている」とまず書いてあることですね。それは、この報告書の(ま)にももちろん出てますけれども、それより前に、「弘安文禄征戦偉績」という本が出た時に、芝葛盛という人がこの咸鏡道の租税牒を出しているんです。そこで重要なことは、この前のこっち(研究史整理資料)ですと、文禄慶長の役のこちらの壬辰倭乱で日本の方で処理したのがあるでしょう、これの6頁(最終報告書31頁)のところ、芝葛盛という人が書いた…。
- 吉田 それを読めということですか。
- 北島 読んでくれといっているのじゃなくて聞いてください。この人が言っていることは、このように日本軍は朝鮮を攻めてそして土地をきちんと整備して租税制度を整えた。だから、立派なことをやったと。日露戦争に行く日本の兵隊さんもこのことをちゃんとよく覚えて、日本の過去のいろんな業績、加藤清正の業績を学んでくださいと書いたんです。この論文で葛さんという人は、ところが、池内先生は同じく史料を使って、その占領政策の収奪の実態を明らかにした。池内さんの場合は、そういう植民地主義的な視点というのは、それを否定して、その実態を明らかにしたんです。そういうことなので、そこはちょっと池内さんの理解が違うと思うんです。
- 次、いいですか。それから、さっき学説は1945年以降の学説に、日本側の学説を整理して、僕の名前を出してくれたのはありがたかったんですが、1人大事な人を落としていたんですよ。それは、鈴木良一という人。「豊臣秀吉」、この人は池内先生に習って、池内先生がきちんと実証したそれをもとにして、これまで文禄慶長の役の研究とあったけれども、朝鮮人民の抵抗の歴史がなかったということで、すごく視点を変えたんですね。ですから、僕たちはやはり鈴木さんの影響が強いですね。そういうことが1つあります。
- 池内先生は事実を確実に教える人なんですよ。池内先生から習って、それをベースにして、要するに日本と朝鮮の人民にとってこれは何であったのか、というこの壬辰倭乱は、それを研究した。これが、やはり戦後の日本の1945年以降の日本における壬辰倭乱研究の一番重要なポイントなんです。それで次。
- 吉田 申し訳ありません、ちょっと時間がありませんので、またそれは個別にお願いすることにしたしまして、ほかの論点、ご質問、ご意見、それでは田代先生が1つだけなさるそうなので、お願いします。

鄭求福 今、北島先生がおっしゃったことについて、お答えできることについてだけ簡単にお答えしたいと思います。北島先生がいろいろな歴史事実や研究状況についてお教えくださったことを大変ありがたく思います。現代の日本における壬辰倭乱の研究史において鈴木先生の占める重要性について、北島先生の研究史を通じて知ることができました。今後参考にして参ります。咸鏡道の租税牒について、芝氏が1905年に「史学会」に文章を載せたということは、私も存じておりました。したがって、日本語版において、池内先生が初めて引用したという部分については私が修正しましたし、そのことについて今回の発表でも申し上げました。

それから一つ申し上げるならば池内先生が「朝鮮征伐」を「文禄慶長の役」としたことについて、発展的であるとして、肯定的に評価したりしてはならないと思います。彼が「文禄慶長の役」としたのは、1910年に韓国が日本の植民地下に入り込んだので、既に朝鮮征伐という表現を使う必要もなかっただけでなく、また池内先生は、朝鮮との戦争ではなく、明との戦争であったということを強調したので、朝鮮征伐のことを文禄慶長の役と称したことを高く評価してはならないと思います。以上です。

吉田 ありがとうございます。それでは橋本さんのほうから1つご意見があるそうです。

橋本 日本語版の8頁、注の31番(最終報告書496頁注35)、古文書の解釈です。

六反田 韓国語版は10頁の注の32番になります。

橋本 二つ問題があって、一つは、最初の方の朱印状の「彼地」ですが、これは寧波のことで、博多のことではありません。それからもう1つは、仰せ付ける、仰付と書きます。この意味は、多分伝達するとか、文章をやり取りして伝えるという意味で読んでいるんだと思いますが、日本語の古文書では意味が違って、そこに書いてある意味です。

鄭求福 今、橋本先生がご指摘なさいました韓国語版で注32番の博多に関してこれが寧波であるというご指摘について私はそのように思いません。また、改めて説明いたします。この「彼地」ですが、これを寧波とみることは出来ません。これは、この先、博多を撃つという意味で使われているので、すぐ前に出ている博多であると判断せざるを得ません。その前の文章におきましては、寧波という単語は出てきません。そして、2番目の「可被仰付」という四字について池内先生は、何を意味しているのかよくわからない、曖昧である、そして全体の文脈からみた場合、おそらく撃つという意味であると解釈しています。したがって、この「可被仰付」の解釈につきましては、日本古文書の専門家でない私としては断定できませんけれども、日本の古文書を研究なさっているいろいろな方の見解を取り入れて、今後参考にしたいと思います。

しかし、私が「可被仰付」につきまして、なぜ疑いを持ったかと申しますと、全体の文脈からして、まず撃つとか攻撃したと解釈すると意味が通じないからです。これは今後より一層検討されなければならない問題であると思います。

吉田 いったんここまでということにさせていただければと思います。その具体的な問題についてはまた次の段階ということにいたしまして、時間がありませんので、ほかのご意見も聞きた

と思います。それで、私も少しお聞きしたいことがあります。

一番最後の結論の部分です。これは、教科書問題との関連です。韓国語版の16頁の9行目(最終報告書507頁)、一般国民、このところで、このように書かれております。読んでみますと、「一般国民にとっては、現在の歴史学者の研究成果よりも過去に自分が習得した歴史的知識の方が歴史意識に作用する。日本の国民を覚醒させるために、そして日本の国家発展のために、過去における侵略の歴史を美化したり隠蔽することは決して望ましいことではない」というふうに、日本側を指導される必要があるのでしょうか。

鄭求福 私としては、日本側を指導するとか、そういう用語を使うことはできません。しかし、日韓歴史共同委員会の発足の動機について具体的に申し上げる前に、私がひと言申し上げるならば、「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書が扶桑社から発行される直前に私はそれを読んで、日本が過去の歴史に対して反省していないということが厳然と存在している事実を知りました。色々な例がありますが、最も代表的な例を1つだけ挙げることにいたします。近代編において、韓国の地図、東アジアの地図を載せ、日本から韓国を眺めた場合、有事の際には、日本を向いた凶器になると説明しています。その後、韓国側の強い抗議によって多少修正されましたが、韓日の関係史に対する基本的な視角は、この本においては、日帝時代の植民史観を踏襲していると私は考えます。

吉田 これは事実と違います。これは詳しい、北島先生。

北島 特定のグループだけがやっていて、我々、みんな反対しているんです。ですから、私も教科書を書いています。で、もう一生懸命良心を持って書いているんです。あの人たちはもう、批判されても書き続けています。

吉田 ちょっとそれで、もう1つだけ、今と関連して、その次のパラグラフです。重要なことが書いてありました。これについてご質問したいと思います。よく見ますと、日本語では「さらに第2世代の教育のための教科書は、未来志向的で健全な歴史観に基づかなければならない」その次です。「韓国の場合は国定教科書であるため、外国に関連する問題は、相手国にひどく嫌悪感を与えるような表現は節制されている。一方、日本の場合は検定であるため、外国に対して嫌悪感を与えるような自国中心の表現を節制するのが容易ではないだろう」。2点質問いたします。第1点、検定教科書よりも国定教科書のほうがよいと先生はお考えと確認してよろしいですね。それから第2点、しかし、韓国でも近・現代史の教科書は検定に移りました。このことは間違いとお考えだということよろしいですね。

鄭求福 私も、日本のすべての教科書がそうであると申し上げた訳ではなく、特定の教科書がそうであるということを上げました。日本の教科書は検定であるので国定教科書のほうがいいのか、というご質問についてお答えします。国定教科書はさまざまな問題点を持っております。多様な歴史意見を著述することが出来ないからです。しかし、ここで私が言及したのは、外国との関連事項についてだけ述べたものです。国定教科書の場合は隣国に対して被害を与えるような表現は調整することができますけれども、検定教科書の場合は、複数の執筆者が多様に記述することについて基準を定めることとなりますので、その

ような歴史観をコントロールすることはほとんど不可能なためです。したがって、韓国におきましてもこれまでの国定教科書から、今後は個人の多様な歴史解釈を記述することができる検定制度の方向に進む趨勢にあり、私もそれを積極的に主張している一人です。

吉田 しかし、ここで先生の言っていることと違いますね。

鄭求福 私が最初の日本語版ではごく簡単に記述していますが、その後、韓国側委員が検討し、私も再度考えて、韓国語版においては文章を補っております。したがって韓国語版を御覧になれば、大きな誤解はないだろうと思います。

吉田 この問題については、また別ですので、では、時間もありませんから、田代先生の方から。

孫承喆 今12時を過ぎましたが、時間はどうするのか…、まず時間を決めてから…。もっとやってかまいませんが、自由に討論するのですから…。時間を決めて延長すればいいのですから、まず時間を決めては…。

吉田 2時間ですから、始まったのが10時20分、2時間後ですからあと12分ぐらいです。

孫承喆 十分ですか、その時間で。

田代 私はもうものすごく簡単です。この第2分科会の作業について、ちょっとお考えいただきたいんです。昨年の7月7日に私たちは3つの項目を作りまして、それについて研究史資料を作りました。研究史の整備をいたしまして、それを先日3月の時にお互いに交換しました。それは、さらに今年1年かけて改訂していこうということです。それと並行しながらそこから出てきた新しいこれからの未来志向の問題を提起して新しい個別研究を始めるというのが、今回第1回からの会合です。それで、2つほどあります。その今日のこの先生のご研究を拝見いたしますと、これは過去の研究史整理です。整理してそれに先生のご意見を加えたものです。もしできましたら、これは研究史の整理のほうに入れていただきたいと私は考えます。それが1点。

第2点です。韓国語版の8頁、註の20(最終報告書494頁註22)。註20に私たちの日本側の発表しました文禄慶長の役の研究史、研究資料を引用されています。註の20です。先生のご研究は多分にこれを読まれてかなりこの研究を資料整理なさっているということは分かるんですけども、これの表紙を御覧下さい。右の下のところ「引用不許可」と書いてあります。これは、これから改訂していきます。これはまだ不完全なので、引用されては困ります。

鄭求福 今回の私の研究が前回、発表された研究史と重なる部分があるということは認識しています。しかし、両国の歴史認識を比較して説明するのは私の独特な観点だと思います。したがって、現代史に関する傾向は、主に研究史の方に譲ろうと思います。

2番目の御指摘、引用不可となっておりますが、私たちの間での共同研究以外には外部に出ることはありませんので、この資料を内部の資料に基づいて作成したということですので、互いに認められるべきであろうと思います。研究史文献目録が修正されれば、

私のこの註釈も修正することになります。

田代 それはルール違反だと思います。

孫承喆 私も田代先生のご意見の通りだと思いますが、結局、これが最終的に完成すれば一般の人に公開されるわけですので、これを事前に引用することは、我々の内部では、このような発表や討論の過程では引用も可能だと思います。しかしあとに文書になる場合には引用してはならないと思います。

鄭求福 分かりました。

田代 認識論なので、新しい研究とおっしゃいますけれども、書いてある内容は研究史の整理ですね。それで、今日の夕方から、文禄慶長の役の研究史整理の検討に入ります。前回の分科会で研究史、特に日本側からおおよそ問題が指摘されたように、研究史になっていないという指摘があったと思います。それで、これから少しずつ検討しようということで、今日の夕方やと思うんですけども、私、今回、鄭求福先生の報告を拝見いたしますと、これは非常に研究史としてまとまっていると思います。何年に何があって、そしてどうふうにどういう主張があったか、認識を1つずつ明らかにされていますので、これで日本の1945年以降のそれぞれの発展と一緒に入れて、そして検討なされると、立派な研究史整理になると思います。そういうかたちで韓国側で少し調整なされて、研究史の整理のこれから検討に入るとしますので、それを踏まえて考えたいかがでしょうか。

吉田 配布された研究史整理を再検討いたしますので、今日、お話されたことを基礎にして午後からもう少し発展的なお話をしたらどうかと思います。

鄭求福 それは歴史観や史学史の意味をあまりにも過小評価するものだと思います。私の発表は研究史的なものがその基盤になっていますが、そのような研究史を学史的に整理したものと見てはいけません。したがって私の論文の骨格は、第5節の「壬辰倭乱の性格と歴史的意味」という部分を補完すれば、研究史とは別途の論文となると思います。したがって、研究史と重複する部分は、可能な限り、できるだけ避けるよう努力します。以上です。

田代 今回、全く原稿のない「壬辰倭乱の性格と歴史的意味」を読んでいただければとおっしゃるんですが、無いので何ともいえないので、これを個別研究として読まれるかよくわかりません。

鄭求福 その原稿は、本学術会議が終了する前に、私が原稿の形で私が皆さんにご提示し、相互討論を行えるようにしたいと思います。

吉田 私から最後、希望ですけれども、先生の研究、史学史ですけれども、日本で読んだ場合、根拠がほとんど書いてないので、言われていることが実際その通りなのか、一体それをどのように考えるかということが分からないんです。そこを補強をしていただければ、我々も非常に参考になると思います。

鄭求福 もちろん補強してまいりますけれども、根拠としてたくさんの資料を引用をしているのに、それを一般的にそのように評価されるのは失礼ではないでしょうか。

吉田 やり合う時間はありませんので、また後ほどお話いたします。

孫承喆 それでは韓国側の発表と討論はこれで終わりにして、発表と討論は今後も続きますので、制限を設けることなく自由な学問的討論を通じて内容を補充していければと思います。

吉田 どうも鄭求福先生、ありがとうございました。それでは午前中の発表をこれで終わりにいたします。